

子育て支援に関わる保育者が捉える役割期待の理解の検討

—コロナ禍前後の比較調査に着目して—

大 森 弘 子¹⁾・岡 村 幸 代²⁾

A study of perceived role expectations by childcare workers
involved in child rearing support : a comparison of role expectations
before and after the COVID-19 pandemic

Purpose : This study focuses on childcare workers involved in child-rearing support, and how childcare workers' understanding of parents' role expectations studied before and after the COVID-19 pandemic. The analysis of child-care workers utilized a questionnaire.

Methods : The statistical analysis software, SPSS statistics 27.0J, was used to analyze the perceived role expectations of childcare workers, and the text mining software, KH Coder (Ver. 3), was used to analyze the free descriptions.

Results : The software analysis provided three conclusions. (1) Childcare workers' understanding of the parents' role expectations and their sense of achievement as childcare workers were significantly higher after the COVID-19 pandemic (based on 2023 data) than before the COVID-19 pandemic (based on 2017 data). (2) Childcare workers with a higher sense of achievement have a better understanding of role expectations of parents and can practice better childcare which matches the role expectations of parents. (3) Analysis of frequently used words before and after the COVID-19 pandemic suggested there was a change in the quality of words, such as "Snuggling" and "information." However, the word "Snuggling" in the post-COVID-19 group was only detected in the high achieving childcare worker group.

Conclusion : After the COVID-19 pandemic, it would now be appropriate to respond to parents' role expectations of childcare workers and explore new and more effective child-rearing support, so that opportunities for early childhood education through kindergarten participation and other events are maximized.

[Key words] childcare support ; role expectations of childcare workers ;
COVID-19 pandemic

[キーワード] 子育て支援、保育者への役割期待、コロナ禍

I. 問題と目的

昨今の新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 流行期間中、我が国の園 (幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園) の行事には、中止や変更が

加えられた。厚生労働省 (2018) の「保育所における感染症対策ガイドライン」は、園の行事を行う際の換気や密にならないことへの配慮を求めている。一方、日本保育学会 (2023) は、コロナ禍において園の75.0%ができるだけ (行事の) 中止は避け、内容や方法、時期を変更した現状を報告している。コロナ禍中でも園行事が実施された理由は、園行事という子どもの園生活の姿と成長を

1) 京都市教大学

2) 社会福祉法人橘福祉会 橘今保育園

保護者と分かち合う機会において、子どもの新たな発見や感動、活動の展開を育むことが期待されているからであり、各園がガイドラインや感染状況に応じた適切な対策を行った上で園行事を行ったことは、容易に推測できる。

一方、ベネッセ教育総合研究所(2022)は、2015年と2022年の保護者を比較し、「将来うまく育つか不安」「わずらわしくいららする」「どうしてよいのかわからなくなる」等の「保護者の子育てへの否定的な感情」の増加を指摘している。これらの保護者の否定的な感情は、最も身近で家庭を支援する保育者(幼稚園教諭、保育所保育士、幼保連携型認定こども園保育教諭)にも向けられ、コロナ禍前後における保育者の心や身体、働き方に影響していることが推測される。保育者の心や身体に関して藤後(2021)は、「コロナ禍によって保育者の22.0%に精神疾患の危険があり、責任と疲労が蓄積している可能性が高い」と指摘している。

コロナ禍で保育者には、保育業務としての子育て支援が一層求められた。そして、保育者が求められる役割期待の理解を高めることができたならば、保育者は現下の保護者が求める支援との整合性が極めて高い支援を提供できると考えられる。

中田(2021)は、コロナ禍が「思わぬ形で家庭に影響を与え…(中略)…普段子どもと接する時間が少ない親が、子どもと一緒にいることで時間を持て余すケース」を指摘している。一方、保育者は普段子どもと接する時間が多く、子どもの発達に望ましい変化をもたらす保育的行為をとることができる。また、家庭を支援する保育者には、児童福祉法第18条の4(2003)において「保護者に対する保育に関する指導」に関する業務が定められている。

大森(2017)は、「育児不安を抱える保護者が示す保育者への役割期待」について調査し、「連携と個別支援」「家庭への援助・相談」「社会への発信・継承」の3因子を指摘した。そしてコロナ禍前後において、保護者が求める保育者への役割

期待が更に変化し始めた今、保育に関する指導の原理や技能を示すことは、喫緊の課題と言える。

そこで本研究では、2017年調査の追跡調査を行い、コロナ禍前後における「子育て支援に関わる保育者が捉える役割期待の理解」等について比較・検討する。具体的には、現職保育者を対象に、家庭を支援する上で必要となる「保護者が求める保育者への役割期待の理解」「保育者効力感」「子育て支援に関わる保育者」を調査し、保護者が求める支援との整合性が高い保育の提供を目指す。このことによって、少子化時代における子育ての困難さや、コロナ禍を契機にさらに加速化した保護者の子育てへの否定的な感情を支え、保育者による子育て支援業務の向上に資することを目的とする。

Ⅱ. 方 法

1. 調査協力者及び調査時期

コロナ禍前(2017年)の調査協力者は、近畿圏の6園(私立幼稚園3園・私立保育所3園)で働く現職保育者で、大森(2017)における予備調査として下記の調査内容データを既に取得していた。質問紙調査は、自記式調査用紙及び封筒等を準備し、園長を通して保育者に調査協力を依頼した。

コロナ禍後(2023年)の調査協力者は、コロナ禍前と同質の近畿圏の6園(幼保連携型認定こども園2園・私立保育所4園)で働く現職保育者^(注1)である。コロナ禍前の調査時期は、2017年8月から2017年12月、コロナ禍後の調査時期は、2023年3月から2023年4月であった。

2. 調査内容

保育者の属性と保育状況を問う項目として「性別」「年齢」「保育経験年数」「担当クラス」への記入を求めた。下記の3つの内容を調査用紙に組み込んだ。

[1] 役割期待の理解：大森(2017)による「保育者への役割期待の内容」13項目。回答は「非常にそう思わない」「少しそう思わない」「どち

らともいえない」「少しそう思う」「非常にそう思う」の5段階評定（1～5点）で得点化した。役割期待の理解13項目は、20年以上の勤続経験がある保育者10名を対象に予備調査を実施し、「保護者が求める子育て支援に関わる保育者への役割期待」について、自由記述で回答を求め、KJ法（川喜田、1967）に準じて構成された。

- [2] 保育者効力感：三木・桜井（1998）による「保育者効力感尺度」10項目。回答は「ほとんどそう思わない」「あまりそう思わない」「どちらともいえない」「ややそう思う」「非常にそう思う」の5段階評定（1～5点）で得点化した。効力感の起源はBandura（1977）による概念であり、三木・桜井（1998）は保育者効力感を「保育現場において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義している。本研究では三木・桜井（1998）の定義を支持する。
- [3] 自由記述：文章完成法を援用した自由記述により子育て支援に関する回答を求めた。具体的には、「私は子育て支援」「子育て支援に保育者は」「保育者が子育て支援に関わる力をつけるためには」という短文刺激を文頭に提示し、後に続く未完成の文章を自由に連想し記入するよう求めた。

3. データ分析方法

役割期待の理解及び保育者効力感の分析には統計解析のソフトSPSS Statistics 27.0Jを用い、自由記述の分析にはテキストマイニングのためのソフトKH Coder（Ver.3）（樋口、2014）を用いた。テキストマイニングとは、日常生活において使われている言葉を処理する解析手法であり、KH Coderを用いることで、文章型データの中に多く出現した言葉を機械的に取り出して可視化し、言葉同士の繋がり方を描くことができる。

4. 倫理的配慮

調査協力者にはデータは全て統計的に処理し、

個人を特定することはないことを伝え、同意を得た上で調査を実施した。なお、調査実施に関わる配慮等は、日本保育学会倫理ガイドブック改訂委員会（2023）の倫理基準に準じた。また、本研究のコロナ禍前（2017年）調査は、佛教大学「人を対象とする研究計画等審査」倫理審査委員の承認（H29-21）、コロナ禍後（2023年）調査においては、京都文教大学「人を対象とする研究」倫理審査の承認（2022-13）を受けて実施している。

Ⅲ. 結果と考察

1. 現職保育者の属性

コロナ禍前（2017年）の調査協力者は、近畿圏在住の現職保育者81名（男性2名、女性79名）であり、平均年齢が35.04歳、標準偏差が12.07であった。キャリアを確認するために問うたコロナ禍前の調査協力者の平均保育経験年数は11.54年、標準偏差は9.87であった。また、保育者の担当クラスは0歳児クラス10名、1歳児クラス12名、2歳児クラス14名、3歳児クラス13名、4歳児クラス7名、5歳児クラス6名、フリー19名であった。

比較するためのコロナ禍後（2023年）の調査協力者は、近畿圏在住の現職保育者96名（男性7名、女性89名）であり、平均年齢が37.72歳、標準偏差が12.16であった。コロナ禍後の調査協力者の平均保育経験年数は13.00年、標準偏差は10.00であった。また、保育者の担当クラスは0歳児クラス11名、1歳児クラス15名、2歳児クラス16名、3歳児クラス16名、4歳児クラス11名、5歳児クラス14名、フリー13名であった。

コロナ禍前後の調査群の属性内容を検討するため、群（コロナ禍前群、コロナ禍後群）を独立変数、両群の年齢と保育経験年数を従属変数とする1要因の分散分析を行った。その結果、全てにおいて有意でなく（順に、 $F_{(1,175)}=2.15$, $n.s.$; $F_{(1,175)}=1.57$, $n.s.$ ）、両群における保育者の属性はほぼ均質であると推測される。

現職保育者が働く地域は、大都市へのアクセスが良い地方都市であり、自然豊かで娯楽施設が多

く買い物に便利で、子育てしやすい地域である。

2. 役割期待の理解に関わる検討

コロナ禍前後による保育者の「役割期待の理解」を比較・検討するために、時期（コロナ禍前、コロナ禍後）を独立変数、コロナ禍前後の役割期待の理解を従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果、有意差が見られた ($F_{(1, 175)} = 16.83$, $p < .001$)。

表 1 には、「保育者への役割期待の内容」13項目に対する保育者の理解の変化を図示した。時期を独立変数、13項目毎の役割期待の理解を従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果、「4 子育て文化を継承する支援ができる」及び「5 利用できる社会制度やサービスを知っている」を除いて、コロナ禍前よりもコロナ禍後の方

が、有意に役割期待の理解の平均値が高かった。

3. 保育者効力感に関わる検討

コロナ禍前後による「保育者効力感」を比較・検討するために、時期を独立変数、保育者効力感を従属変数とする 1 要因分散分析を行った。その結果、コロナ禍前よりもコロナ禍後の方が、有意に保育者効力感の平均値が高かった ($F_{(1, 175)} = 13.67$, $p < .001$)。

コロナ禍後の保育者効力感10項目の総得点の平均値が36.73であることから、 ± 1 標準偏差(5.45)を効力感の高低基準として群分けした。コロナ禍後における保育者効力感の高低（効力感低群、効力感中群、効力感高群）による役割期待の理解を分析するために、保育者効力感の高低を独立変数、役割期待の理解を従属変数とする 1 要因分散分析

表 1. コロナ禍前後の時期別に見た役割期待の理解の平均値及び標準偏差

項目番号 質問項目	コロナ禍前		コロナ禍後		p
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1 保護者と協働しながら子どもの発達を援助することができる	3.78	.866	4.24	.707	$p < .001$
2 地域の親子に安心して遊んでもらえる遊び場を提供することができる	3.42	.893	3.71	.939	$p < .05$
3 子育てについて社会へ発信できる	2.99	.844	3.31	.898	$p < .05$
4 子育て文化を継承する支援ができる	3.14	.959	3.38	.921	<i>n.s.</i>
5 利用できる社会制度やサービスを知っている	3.17	.985	3.38	.987	<i>n.s.</i>
6 積極的に関係機関との連携を持つことができる	3.01	1.031	3.55	.905	$p < .001$
7 不適切な子育てを早期に発見し保護者支援ができる	3.38	.874	3.71	.832	$p < .05$
8 園児を含む家族全員が健康な家庭生活を過ごす支援ができる	3.07	.905	3.56	.831	$p < .001$
9 生きる意欲を支える家庭形成に向けての助言ができる	3.02	.880	3.56	.856	$p < .001$
10 保護者の子育てに関して共感する力がある	3.73	.758	4.26	.729	$p < .001$
11 保護者の栄養指導や相談援助ができる	3.12	.914	3.50	.984	$p < .05$
12 関係機関との連絡を図りコーディネートする役割を果たすことができる	2.70	.993	3.22	.965	$p < .001$
13 困難な課題を抱える家庭の子育てを支援できる	3.10	.982	3.43	.843	$p < .05$

を行った。多重比較の結果、効力感低群<効力感中群<効力感高群の順でコロナ禍後の「役割期待の理解」の平均値が高くなっていた ($p<.05$)。三木・桜井 (1998) の保育者効力感の定義に従えば、「保育現場において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」の高い者ほど役割期待の理解が高く、保護者の役割期待に合致した保育を実践できると解釈される。

4. コロナ状況下での保育者

コロナ状況下では、外出自粛による対人交流の減少や家庭内の問題の顕著化、他方でICTの活用増加等が社会的にもよく知られている。断続的な閉園や、家族の感染等による登園停止等が日常的に見られた。また、ベネッセ教育総合研究所 (2022) が報告した「保護者の子育てへの否定的な感情」の増加の背景には、コロナ状況下での閉塞感、とりわけ対人関係面での行き詰まりと孤立が推測される。

野澤ら (2022) は、コロナ禍での「保護者とのコミュニケーションにおけるICTの活用」について、「半数程度が「変わらない」と回答している一方で、3割近くが「多い」と回答している」ことを報告している。

以上から、コロナ状況下での保護者支援の大きなポイントとして、保護者との関係継続や、コミュニケーションの確保が想定される。コロナ状況下によって、かえってICTの活用による保護者とのコミュニケーションが多くなれば、保育者は保護者の役割期待を理解する機会が多くなり、保護者との情報共有や意思疎通のために連絡帳を使うことも示唆される。例えば、保護者が子育てについて困難な課題を抱えた時、日頃から最も身近で家庭を支援する保育者は頼りになると考えられる。また調査協力者が勤務するA園長は、保育者が保護者の役割期待を理解するために、連絡帳や指導計画を熱心に考察したり (図1)、日々変化する情報を発信したりして、コロナ禍で子育てを共有



図1. 保育者が連絡帳や指導計画に記入しているところ

できる実践を語っていた。

コロナ状況下では、閉塞化する保護者を支えるために、平常時以上に、保護者とのコミュニケーションの確保や積極化等が求められる。そして、保育者効力感の高い保育者ほど「現状を打開・変化させる保育実践への信念」が高く、連絡帳記述・情報の発信等の、「今できること」への尽力に繋がる。その結果としての保育現場での達成感が、保育者効力感を高め、役割期待の内容をより正しく理解することに繋がったのではないであろうか。換言すれば、コロナ禍が家庭を支援する保育者の役割期待の理解を高めたことが示唆される。

5. 保育者が捉える子育て支援の変化

コロナ禍後の役割期待の理解が高い保育者に注目すると、子育て支援について、「保護者にママ友ができ、日頃の悩みを聞いてもらうことができ、保護者の気持ち安定している」「(コロナ禍) 以前よりも保育者がしなくてはいけない仕事が増えた」等の自由記述が見られた。

自由記述はテキストマイニングを援用し、頻出語及びコロナ禍前後の特徴語の量的・質的分析を行った。分析は、岡村・片山 (2018) を参考にした。総抽出語は14,654語であり、分析対象として認識された語は1,160語となった。コロナ禍前後

表2. コロナ禍前後における15回以上出現した頻出語

コロナ禍前群		コロナ禍後群	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
保護者	99	必要	88
必要	64	保護者	87
子ども	63	子ども	56
大切	58	大切	52
支援	47	考える	42
子育て	41	支援	35
理解	39	積極	30
考える	37	知識	30
家庭	25	子育て	29
感じる	25	研修	28
子育て支援	25	保育	28
知る	25	関わる	27
知識	25	感じる	24
保育者	25	知る	22
保育	24	保育者	22
関わる	22	家庭	21
研修	22	学ぶ	20
積極	22	経験	19
地域	21	行う	19
持つ	20	日々	19
経験	18	聞く	19
学ぶ	17	相談	18
勉強	17	理解	18
聞く	16	寄り添う	17
自分	15	子育て支援	17
色々	15	情報	17
対応	15	関係	16
様々	15	話	16
		持つ	15

における頻出語の分析を行った。15回以上出現した語を表2に示す。

上位の語は、コロナ禍前後で同様に「保護者」「必要」「子ども」「大切」「支援」等であり、短文刺激の内容から考えても当然と言える。コロナ禍前後で出現回数が20回以上増減している語は、「必要」(コロナ禍前64回→後88回)、「理解」(コロナ禍前39回→後18回)であった。コロナ禍後に出現回数が15回以上になった語は、「行う」「相談」「寄り添う」「情報」「関係」「話」であった。次に、上記の増減の多い7語(「必要」「理解」「行う」「相談」「寄り添う」「情報」「関係」)に着目し、短文刺激のいずれの回答に特徴的かを分析することとした。

分析の結果、コロナ禍前後で出現回数に変化のあった「理解」「相談」「寄り添う」「情報」の4語がJaccardの類似性測度の大きい語として抽出された。結果を表3に示す。

さらに、「理解」「相談」「寄り添う」「情報」の

4語について、テキストデータに戻り、これら4語がどのような文章中に共起しているのかを確認するためコンコーダンス分析を行ったところ、「理解」「相談」では、コロナ禍前後で明らかな質の変化は認められなかったが、「寄り添う」「情報」で質の変化が認められた。

6. 「寄り添う」の分析

コロナ禍後群の「寄り添う」は、保育者効力感高群のみに認められた。コンコーダンス分析の結果、コロナ禍前後を通して「保護者に寄り添う」等、寄り添う対象としての「保護者」を明記した回答がほとんどであった。結果を表4に示す。コロナ禍後では、「保護者の思いに寄り添う」「保護者の心に寄り添う」「保護者の気持ちに寄り添う」等、保護者の何に寄り添うのかが具体的に記述されていたり、「(保護者と保育者)双方の目から見た子どもの姿を受け止め、保護者の思いに寄り添う」等、家庭での子育てを保護者と一緒に取り組

表3. 短文の刺激及びコロナ禍前後による特徴語

1. 私は 子育て支援				2. 子育て支援に保育者は				3. 保育者が 子育て支援に関わる力をつけるためには			
コロナ禍前群		コロナ禍後群		コロナ禍前群		コロナ禍後群		コロナ禍前群		コロナ禍後群	
保護者	.264	必要	.196	保護者	.268	必要	.274	保護者	.240	必要	.280
支援	.237	子育て	.194	支援	.198	子ども	.224	考える	.151	大切	.239
子ども	.235	考える	.150	大切	.165	積極	.179	子ども	.149	研修	.226
大切	.196	保育	.106	子育て	.125	関わる	.174	<u>理解</u>	.146	知識	.157
<u>理解</u>	.184	悩み	.086	考える	.118	保育	.153	支援	.121	経験	.147
感じる	.128	出来る	.079	持つ	.118	<u>寄り添う</u>	.129	学ぶ	.120	知る	.121
知識	.114	持つ	.076	取り組む	.116	行う	.117	子育て	.119	日々	.117
保育者	.107	<u>相談</u>	.076	子育て支援	.107	<u>相談</u>	.097	色々	.116	聞く	.115
勉強	.105	人	.075	協力	.095	環境	.079	取る	.096	<u>情報</u>	.112
自分	.103	分かる	.075	役割	.093	家庭	.077	連携	.094	様々	.103

※「理解」「相談」「寄り添う」「情報」の4語に下線を付した

表4. 「寄り添う」が使用された回答

コロナ禍前後	保育者効力感	短文刺激(2. 子育て支援に保育者は)に続く回答
前	高群	子育て支援に保育者は、 <u>保護者からの悩み・相談等</u> 、少しでも軽減できるようアドバイスをしたり、 <u>寄り添ってあげる</u> ことも大切だと思っています。
前	高群	子育て支援に保育者は、関心を持ち、来られている保護者が何を求めているか理解し、 <u>寄り添うことが大切だ</u> と考えます。
前	中群	子育て支援に保育者は、常に <u>子どもと保護者の事を考えて、目を向け寄り添う</u> 。マニュアル化ではなく、そのケースに合わせて支援することが大切である。
後	高群	子育て支援に保育者は関わる中で、 <u>保護者の心に寄り添う事を心がけ、安心して相談してもらったり、助言できる</u> ようにしていくべきだと思う。
後	高群	子育て支援に保育者は必要で、保護者のニーズも高まっていると思う。 <u>助けてほしいと言えない保護者に、寄り添う</u> ためにも、日々の会話を十分行いながら、気づくことが大切だと思う。
後	高群	子育て支援に保育者は毎日の仕事として関わっていると思います。常に <u>保護者や子どもに寄り添って考えていき</u> たいと思います。
後	高群	子育て支援に保育者は <u>子育てをする保護者に寄り添い</u> ながら、子どもと保護者を保育者で協力しながら子育てを育むこと。
後	高群	子育て支援に保育者は尽力しなければならないと思います。一人ひとりの <u>保護者の思いに寄り添っていく事が大切だ</u> と思うからです。
後	高群	子育て支援に保育者は必要な存在である。園と家庭における子どもの姿は全く違う。子どももいるので、双方の目から見た子どもの姿を受け止め、 <u>保護者の思いに寄り添うべきだ</u> と思う。
後	高群	子育て支援に保育者は保護者に対して、押し付けの支援を勧めるのではなく、 <u>保護者の立場や気持ちを考え、寄り添っていく事が重要</u> である。
後	高群	子育て支援に保育者は知識を持って、温かい気持ちで参加すべきだと思う。 <u>保護者に寄り添い、子どもだけでなく親も安心できる場を作れると良い</u> と思う。
後	高群	子育て支援に保育者は <u>できるだけ寄り添って</u> 、安心して子育てを行えるようにしていくべきだと思う。
後	高群	子育て支援に保育者は保護者の話を親身に聞き、 <u>寄り添うことが大切だ</u> と思う。
後	高群	子育て支援に保育者は欠かせない存在である。保護者の相談にのったり、気持ちに寄り添ったりすることが大切だと思う。
後	高群	子育て支援に保育者は <u>寄り添う必要があり、子どもだけでなく保護者も行う必要がある</u> 。

※「寄り添う」を含む文に下線を付した

んでいく姿勢が述べられたりしている。

次に、他の語との関連を見るために共起ネットワーク分析をしたところ、コロナ禍後群では「保護者」との関連がコロナ禍前より強く、「子ども」

「大切」「相談」「安心」とも関連が強かった。結果を図2に示す。コンコダンス分析と共起ネットワーク分析の結果から、特に効力感高群の保育者が、保護者の気持ちに寄り添うことを丁寧に実

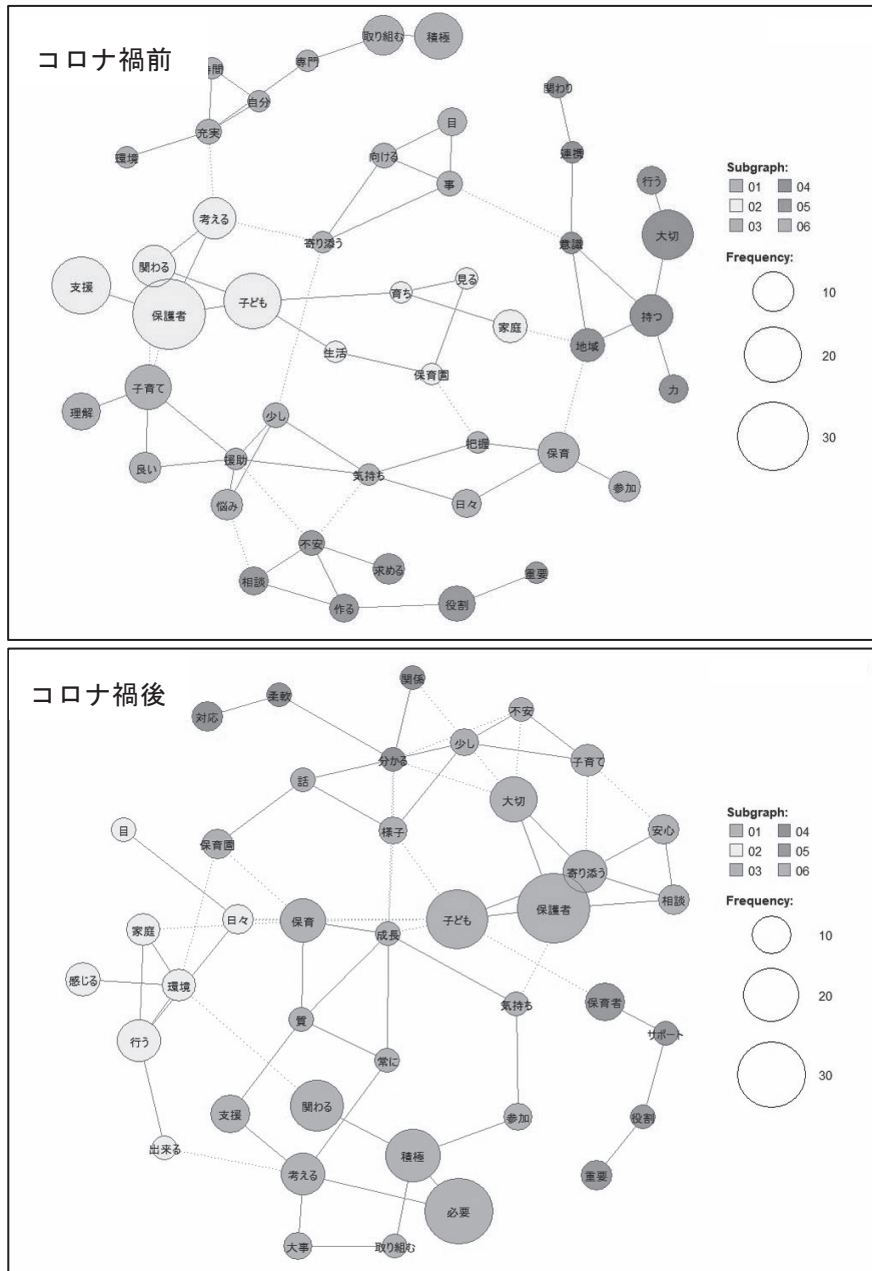


図2. 「寄り添う」のコロナ禍前後における共起ネットワーク分析
(短文刺激「子育て支援に保育者は」に続く回答を分析)

践したり、保護者と子どもの両方に寄り添ったりすることの大切さに気付いた姿が見受けられた。

7. 「情報」の分析

コロナ禍前は、「情報や知識を知る」「情報を共有することが大切」等、情報を知ることの大切さについて回答があったが、コロナ禍後群は、「社会的な状況等を理解」「現在の新しい情報」「最新の情報」「アンテナを張り」と回答があり、最新の情報を積極的に収集し子育て支援に活かす姿が見受けられた。「情報」が使われた回答を表5に示す。

野澤ら（2021）は、国内外のCOVID-19に関わる保育・幼児教育施設の動向を整理している。その結果、日本国内では国が多数の事務連絡を発出していたが、現場では「知らなかった」という場合がみられたこと、国と自治体、自治体同士の齟齬があり、現場に混乱と不満を招いたことが示唆されるとしている。実際に、第二筆者の勤務する保育所でも、国や自治体からの詳しい情報を整理・理解した上で、保護者に情報提供し理解を得

る、ということが困難を極めた。しかしながらそのような状況下でも、多くの園が育児相談や子どもの過ごし方について情報提供する等、子育て支援を行ってきた。例えば石井ら（2021）は、公立幼稚園と私立保育所のコロナ禍での実践事例を紹介し、これまでの保育で培われてきた子ども理解や子育て支援の専門性に加えて、家庭で長時間一緒に過ごすことになった親子への支援を、手紙の郵送、電話、動画配信、連絡ノートアプリ等で、想像力を駆使した支援を行ったと述べている。

自由記述の分析から、コロナ禍後に、保育者は能動的かつ細やかに「情報」収集したり、保護者一人ひとりの「思いに寄り添う」視点を持ったりする等、子育て支援に関する役割期待が変化することが明らかになった。これからは、保育者と保護者での「情報」共有や、保護者に「寄り添う」ことで、誰一人取り残されない子育て支援が望まれる。

Ⅳ. まとめと今後の課題

本研究では、子育て支援に関わる保育者に焦点

表5. 「情報」が使われた回答

コロナ禍前後	保育者効力感	短文刺激（3. 保育者が子育て支援に関わる力をつけるためには）に続く回答
前	高	現状の支援のあり方を知り、地域やセンターの <u>研修等で情報や知識を知る</u> 。
前	高	<u>沢山の情報が必要だと思</u> い、何をしたら良いのか、考えられる環境や協力も必要だと思います。
前	中	現場での経験の積み重ねと日々変化する情報・知識を学ぶ事が必要だと思う。
前	低	様々なケースに対応できるように、他機関や行政及び職員間での勉強等、 <u>情報を共有する事が大切だ</u> と思います。
後	高	<u>社会的な状況等を理解するために、様々な手段で情報を得る</u> 。情報に触れることが大事だと思う。
後	高	<u>研修を通して、現在の新しい情報を知り</u> 、様々な機関と連携をとりながら常に学んでいく。
後	高	<u>いろいろな情報をしっかり知る</u> ことで、保護者や子どもたちとも向き合い、提案しやすい環境作りが大切なのかと思います。
後	高	<u>最新の情報共有が必要</u> となる。
後	高	<u>日々、必要な情報を知り</u> 、様々な子育て支援をアップデートする。
後	中	<u>学びの姿勢と共に、情報等にアンテナを張り</u> 、様々な知識を得る事が必要だと考えます。

※「情報」を含む文に下線を付した

を当て、質問紙を用いて保育者が捉える保護者の役割期待の理解等についてコロナ禍前後での比較・検討を試みた。

役割期待の理解及び保育者効力感の分析には、統計解析のソフトSPSS Statistics 27.0Jを用い、自由記述の分析には、テキストマイニングのためのソフトKH Coder (Ver.3)を用いた。

その結果、次の3点が明らかになった。第1に、保育者はコロナ禍前（2017年）よりもコロナ禍後（2023年）の方が、役割期待の理解や保育者効力感が有意に高くなっていた。そして、コロナ禍前群とコロナ禍後群の「両群における保育者の属性はほぼ均質である」との推測を前提とするなら、少なくとも調査協力者の集団内においては「共通な変化」と認めることができよう。Bandura(1977)は、効力感に影響する4要因（情報源）「達成経験、社会的説得、代理経験、生理的感情の状態」を挙げており、調査結果から、コロナ禍を乗り越えた保育者は、親子の命を守ることができたという達成経験を得て、保育者効力感を高めたと推測される。

第2に、効力感が高い保育者ほど役割期待の理解が高く、大森（2018）の「保育者への役割期待を理解できていると思う参加保育者ほど、保育者効力感が高い」という結果と一致する。保育者効力感と保育者が捉える役割期待の理解には正の相関があり、保護者の役割期待に合致した保育を実践するためにも、保育者効力感を向上させることが大切であると言えよう。

第3に、保育者と保護者で「情報」共有したり、保護者一人ひとりに「寄り添う」視点を持つたりすることで、誰一人取り残されない子育て支援が望まれる。本研究から、コロナ禍後の保育者がより丁寧な子育て支援を実践しようとする姿が見えたと言える。

本研究を踏まえ、今後の課題を挙げる。第1に、2017年と2023年との希有なデータ分析の機会を得たと言えるが、対象となった現職保育者が近畿圏に限定されている点にデータ収集上の課題がある。

今後、データを増やし、これを量的・質的側面から吟味し、コロナ禍後の保護者が求める役割期待を再検証することが課題である。また、柴田(2023)は「保育者の専門性形成の基礎がキャリアと共に変化し発展している」と指摘している。保育者個人内の時系列の変化を、質的に捉えることも今後の課題である。

第2に、コロナ禍を乗り越えた保育者へ、乗り越えたことによる保護者理解や効力感が向上したことを伝える啓発活動である。この啓発活動によって保育者は、自身の保育の専門性を認知し、効力感の向上に繋がり、保育の仕事に喜びや誇りを持って働き続けることが期待できる。

第3に、保育者の日々の業務は多く、質量ともに十分な子育て支援が実施できているとはいえない現実がある。保育者が保護者と子どもの姿を語りあう時間の確保、地域での子育て支援の情報を得やすい仕組みの開発、保護者の思いに添った温かい支援を行っていくための研修プログラム（岡村、2021）の充実等、取り組むべき課題は多い。

注1）本研究では、一般的な中規模園を選定し、コロナ禍前（2017年）に検討を行った。コロナ禍後（2023年）に同一協力者への継続調査を期待したが、6園中3園の継続調査が叫わず、コロナ禍前後の調査保育者の照合が一部できなかった。今後、同一協力者に複数回の調査を実施して、同一協力者が時間を経てどのように変化したのかを検証する必要がある。

引用文献

- Bandura, A. Self-efficacy: Toward a Unifying Theory of Behavioral Change *Psychological Review* 84(2)1977 191-215
- ベネッセ教育総合研究所「子育ての実態」2022
URL: <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000001107.000000120.html>（2023年7月13日最終閲覧）

樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版 2014

石井正子・木村英美・横山愛「新型コロナウイルス感染症流行下で、保育者はどのように子どもや家庭への支援を行ったか」昭和女子大学現代教育研究所紀要第6号 2021 117-127

川喜田二郎『発想法—創造性開発のために—』中公新書 1967

厚生労働省「保育所における感染症対策ガイドライン」2018 URL: <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintouji-doukateikyoku/0000201596.pdf> (2023年7月13日最終閲覧)

三木知子・桜井茂男「保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響」教育心理学研究第46巻第2号 1998 203-211

中田雅敏「コロナ禍と家庭教育」日本家庭教育学会会報第106・107号 2021 1

日本保育学会「第75回大会学会企画課題研究委員会シンポジウムの発表資料」2023 URL: file:///C:/Users/Owner/Downloads/kadai_Report2022_230119.pdf (2023年7月13日最終閲覧)

日本保育学会倫理ガイドブック改訂委員会『保育学研究倫理ガイドブック2023—子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために—』日本保育学会 2023

日本保育協会「児童福祉法 第18条の4」2003 URL: <https://www.nippo.or.jp/hoikushi/center/definition.html> (2023年7月13日 最終閲覧)

野澤祥子・淀川裕美・菊岡里美・浅井幸子・遠藤利彦・秋田喜代美「保育・幼児教育施設における新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討」東京大学大学院教育学研究科紀要第60巻 2021 545-568

野澤祥子・淀川裕美・中田麗子・菊岡里美・遠藤利彦・秋田喜代美「保育・幼児教育施設にお

ける新型コロナウイルス感染症に関わる対応や影響についての検討(2)—2020年度・2021年度の動向と調査結果から—」東京大学大学院教育学研究科紀要第61巻 2022 331-351

大森弘子「育児不安を抱える保護者が示す保育者への役割期待」応用教育心理学研究第33巻第2号 2017 15-26

大森弘子「子育て支援を促す保育者支援プログラムの開発」家庭教育研究第23号 2018 13-24

岡村幸代・片山美香「公民館における子育て支援講座に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴」家庭教育研究第23号 2018 25-37

岡村幸代「母親の心理的変容過程に基づく公民館での子育て支援プログラムの実践開発」家庭教育研究第26号 2021 13-26

柴田長生「新任保育者における、保育者の専門性獲得のための基盤形成について 1—保育実践における能動的側面と受動的側面に着目して—」こども教育学部研究紀要第3集 2023 3-18

藤後悦子「新型コロナウイルス感染症に関連する保育者のストレス要因」未来の保育と教育8巻 2021 33-41

付 記

本研究の一部は、日本家庭教育学会第38回大会において発表しました。本調査にご協力くださいました保育者の皆様に心より感謝申し上げます。なお本研究は、2023年度京都文教大学「ともいき研究推進センター研究助成」(2023-種目4-2)を受けています。